

第3回三重県文化審議会 議事概要

令和6年2月22日（木）
14時から15時30分まで

1 環境生活部長あいさつ

2 議事

(1) 「三重県文化振興計画（仮称）」の最終案について

(2) 意見交換

資料及び参考資料により事務局説明

[委員からの主な意見等]

(委員)

前回の審議会の意見を踏まえて修正されており、わかりやすくなったと感じる。あとはしっかりと計画を実行していただければ、と思う。

ただ、できれば今までの評価の仕組みを見直してもらえると良かったが、その点は、これから計画を実行していく中でもできることだと思うので、県のこれからの頑張りに期待したい。

(委員)

「文化芸術」振興基本計画ではなく、「文化」振興基本計画となっている点は評価したい。「芸術文化」という言葉はあっても、「文化芸術」という言葉はない。「文化芸術」という言葉を使うことで曖昧になっている部分があるので、このタイトルはよいと思う。

また、県立文化施設が協働するとされていることはよいことだと思うが、ただ、日本のいわゆる文化センター（文化施設）は、建物であって、そこには本も絵も展示品もなく、劇団、舞踊団、オーケストラ等が存在する機関になっていない。そのため、よほどの事業費を毎年提供しなければ、十分なものが提供できないというのが現実ではないか。県が、文化センターは図書館や美術館や博物館とは異なるということを理解して、事業費を手当できるか否かを注視していかなければいけないと思っている。

(委員)

前回の審議会で、移動図書館等の意見を述べたが、そういったことを計画に盛り込んでもらったことはありがたく思う。この審議会を通じて、教育の中において文化への意識を持つことの大切さを勉強させていただいた。

1点、計画にはデータベース化について記述があるが、最近、子どもたちが見学した文化施設のPR動画等を製作するという勉強を行っている。そういったことも含め、学校と県の取組をうまくコーディネートできる機関があると学校側も動きやすいと思う。

(会長)

他に意見等はないか。

委員から意見等なし

(会長)

意見等がなければ、審議事項(1)についての審議をこれで終了する。それでは、この案をもって知事への答申としてよいか。

委員から異議なし

(会長)

続いて、事務局から本審議会後の予定についての説明をお願いします。

(事務局)

最終案について、3月の県議会常任委員会において説明・審議をおこなったのち、事務局において、答申のための資料一式を作成し、3月21日木曜日に、会長、副会長から、知事への答申を行っていただく予定となっている。県では、その答申を受けて、県としての案を作成し、教育委員会への意見照会のうえ、3月末に策定、公表したい。

なお、最終案から成案にいたる過程において、文言等に関して、修正を行う可能性があるが、軽微なものについては、事務局で修正を行わせていただきたい。

(会長)

本日で皆様に審議していただく事項については以上となる。今回の三重県文化審議会は、本日が最後の開催となるが、閉会にあたって委員の皆様から、これまでの文化審議会を振り返ってのご意見、ご感想、あるいは文化政策全般に関するご意見などについて、ご発言いただく機会を設けたいと思う。

(委員)

最終案の「はじめに」を読むとその熱量のようなものがわかり、今回の計画はよいものになったと感じている。そして、この計画を作ったことによって、県民の皆さんに三重県の文化の価値に気づいていただければ、と思う。

私は大学で教鞭をとっているが、授業の中で学生に、「私と祭りについて」というテーマで毎年発表してもらっている。伊勢志摩地方に「浅間祭」という行事があり、地域の人たちが一年に一度、富士山に見える神社まで山を登っていくが、それについて学生が「防災につながると思った」という発表があった。

確かに、その行事のため、神社までの道の普請をしたり、地域の人たちが地区内を練り歩いたりすることなどは、災害時の避難にもつながるものがあるように感じた。祭りは伝統行事として地域をつなげるものだが、防災にもつながっているという、新たな価値に気づくことができた。この計画をまとめることによって、三重県の文化の価値が見直されることになればよいと思う。

(委員)

昨年9月に三重県文化振興条例が制定されたが、今回の計画はそれを補填するものであると思う。県民にとって重要なこの条例を実際に具体化するために、この計画があるのだと理解している。

三重県文化審議会は、今回を含めて3回開催されてきたが、委員の皆様が討議されたことがうまく整備されていると感じている。また、審議会の中で何回か討議された財政上の措置についても、今回参考資料で明確にしてもらった。その点もありがたく思う。

(委員)

三重県文化審議会を通じて、文化は県民の皆さんのアイデンティティを形成するものであり、県民としての誇りにつながるものだと改めて気づくことができた。今後は、私たちがどのように主体的に関わっていくかが大切となると思う。観光や教育と連携して、誰かを招待したい、体験や空間を共有したいと思える三重県になっていけばよいと思う。

アンケートの中では、県の南北で差があるという回答があったが、それを格差としてではなく、交流する中で、お互いの違いを良さに変えて、うまく生かす取り組みがあればよい。また、今後、今以上に増えてくる海外の方にも魅力的なものに感じてもらえる取り組みがあればよいとも思う。

最後に、子育て世代としては、子どもたちが楽しんでいるのが一番うれしい。子どもたちの豊かな感性や創造性を育む取り組みを大事にしていきたい。

(委員)

「令和5年度三重県障がい者芸術文化祭」を、昨年12月1日と2日に鳥羽市民体育館メインアリーナで開催し、560～570の作品が出展された。今までコロナ禍でできなかったステージ発表にも多数応募いただき、ホールで開催できた。

同芸術文化祭の入賞作品を県内各地で展示する「みえアートブリュット2024」を、先月は久居アルスプラザで、次は名張市武道交流館いきいきで開催する。そこでは、県内の障がいのあるアーティストの作品と併せて展示している。三重県は南北に広く、どこで芸術文化祭を開催しても観に行きにくい地域がある。そのため、今年も久居や名張で展示会を実施している。そうすることで、近隣の地区からも来場してもらえる。今は、北から南まで作品を観に来てもらえる状況が少しできてきたように感じる。来年度は津市の白山で芸術文化祭を開催する。

入賞作品を一年間県内各地で展示できるようになったことは、「三重県障がい者芸術文化活動支援センター」を立ち上げてもらったことが大きいと思う。県内の様々な地域へ作品を持って行って観てもらえるということは非常に大切なことだと実感している。

(委員)

アンケート調査について気づいたことを2点申し上げる。

1点目、先ほど、南北の文化格差として捉えない方がよいのではないか、という委員から意見があったが、東紀州地域では文化へのアクセスが厳しいという状況があるので、しっかり対応していく必要があると思う。

2点目、子育て世代から、文化活動が難しいという回答があったので、子育て世代が十分に文化に親しむことができる環境の整備が求められていると思う。

また、資料では若い世代に焦点を絞った分析をしてもらっているが、若い世代はSNS等による積極的な情報発信に期待していることや、文化と観光を強く結びつけていることがわかったので、この辺を今後の施策に生かしていけばよいと思う。若い世代におもねる必要はないが、これからの文化を担っていく若い世代の声を十分に聞き取ることは今後も必要になる。

これから計画を進めていくなかでは、うまくいかないところに速やかに対応できる体制づくりが必要である。また、当初、5年ぐらいの計画の方がよいのでは、と申し上げたが、3年の計画だと次の計画につなげやすいというポジティブなとらえ方もできると感じた。

いずれにしても、この計画を契機として、三重県の文化が県内外に注目されるようになっていけばよいと思う。

(委員)

文化政策が進むかどうかは、その自治体にかかっている。素晴らしいオーケストラを持つ県や演劇やダンスを教える県立大学を持つ県もある。図書館に本があるように、美術館に絵があるように、文化センターにソフトが備わってくれば、もっと強力で子どもたちに質の高い芸術を提供することができるのではないかと思う。

自治体が積極的に質の高いものを提供するという意識がないと、なかなか子どもたちが触れるチャンスは与えられない。そういう意味で、計画の中に責任を持つ所管の部が書いていることはとてもよかったと思う。統合学習が始まった時から、演劇のワークショップを統合学習の時間に取り入れている学校もある。三重県で育つ子どもたちのために、県としても強力なお考えのもとに進めていただければ子どもたちが幸せになると思う。ぜひ、県が積極的に推し進めていただければ、と思う。

(委員)

3年という短い期間で計画を実行していくことは大変なこと。計画にはよいことがいっぱい書かれているだけ、ということにはしてほしくないと思う。

実演芸術に携わっている立場として、文化や芸術は非常に危機にあると認識している。コロナは落ち着いたが、回復したとは思っていない。文化や芸術に携わる人が増えたという思いもない。アンケート調査では、8割の方が文化は大切と感じているという結果が出ているが、実際には半分も鑑賞や活動されていないように思う。現実として文化の非常に厳しい状況がある。文化に携わる人間としては、こういう方々に劇場や音楽堂に來たり活動に参加したりしていただきたい。そのために、計画を進めていただきたい。

文化の力とは何かについて改めて考えた時に、一つは文化観光など、賑わいを作る力だと思う。ただ、それだけではなくて、例えば社会的弱者を孤立させないつながりをつくる力や地元の文化を発信するための支えをする力なども文化の力ではないかと思う。そのような地味で見逃されがちなことを文化の力として再認識しないと、文化はうまくいかないと思う。

最後に、アンケート結果の自由意見欄に「文化芸術のことはよくわからない」という意見があったことが興味深い。多くの人が「わからないから」と言いがちだと思うが、「わからない」と思っている文化を少なくとも体験させよう、観に行こう、触れさせよう、携わってみようとなるのが大切だと思う。

(委員)

岡田文化財団事業には公募助成事業があり、2024年には178件の申請があった。多くの文化活動を行っている団体や個人は、人、物、金で困っている。同財団ではお金の助成しかできない。もし県が、基本目標である「文化の力で心豊かに活力ある三重」を実現しようとするには、こういった文化団体等のボトムアップを図らなければ駄目だと思う。実際は178件ではなく、もっとたくさんの文化団体等が存在するはず。こういった文化団体等はあくまでも点でしかなく、彼らを線でつなげていくことが行政の

仕事ではないかと思う。

今回の計画は県からのトップダウンであり、ボトムにはつながっていないように感じる。「各主体に期待される役割」とあるが、文言が「期待します」で終わっており、素案から弱まっているように思う。そうするとボトムアップは弱くなっていくので、下から見た時にどうしたらよいかということはぜひ考えてほしい。また、年間スケジュールについて、具体的にどのように進めていくか見えないので、もっとオープンにしてもらいたい。これから組織される評価・推進会議では、ぜひ具体的にこの計画を進捗管理するための議論を期待したい。

(委員)

過去には三重県文化会館で子どもたちのためのオペラの鑑賞会があったが、久居のアルスプラザでは、子どもたちを募集してミュージカルの公演が行われる予定であり、いろいろと三重県でも取り組んでいると思う。NHKでも三重県のことに取り上げられており、全国に知られる機会が多くなってきたと感じる。

「暇と退屈の倫理学」という本を読んだが、そこでは、何かに打ち込んだ後、暇になったときに人間が求める文化というものは、全てカタログとして提示されたものであり、それをなんとなく選んで、満足していると勘違いしているだけではないか、とあった。

行政の役目として大事なものは、本当に文化活動をしたい人たちへの資金の提供、場所の提供。郷土芸能のような、失ってはいけないものに資金を与えて受け継いでいくこと。そして、子どもの頃から質の高い文化や芸術にふれ親しむ機会を提供すること。この3つではないかと思う。この計画にはたくさんの方が書いてあり、本当に3年でできるかどうかは疑問だが、これとこれは絶対やるというようなものを作ってもらいたい。

すべての子どもたちに、社会見学でよいかから三重県文化会館に来てもらって、その時に何かを見せることで、その中の何人かは自分の心を打つものが見つかると思う。そういう機会をたくさん与えてあげてほしい。ただ、大人でも経済格差があって、お金がないと何も見ることができない。文化に対する経済格差は大きな問題だと感じている。

(委員)

自治体の積極的な行動が大事であるという他の委員の方からのご意見を聴いて、自治体の職員として、何ができるだろうかということを考えながら話を聞いていた。活動する場所や資金を提供すること、子どもたちが小さい頃から心震えるような体験をできるよう支援をすることなど、行政ができることは環境を整え支援することだということは、本当にその通りだと実感している。そういった取り組みを県とも連携しながら進めていけるとよいと思う。

そして、外部からの評価を受けることは、身の回りのものを改めて見直す機会になる。文化と観光を結び、外に向けて発信して、三重県は良いところだと外から言ってもらおうことの大切さを実感した。私たちとしても、文化観光推進法等に基づいた取り組みを着実に進めながら、県と市町の連携の中で果たせる役割を果たしていかなければと改めて感じた。

(委員)

この計画の対象期間は3年間だが、長期的なビジョンを持って取り組む、というところで、もう少し暖かい目でみてあげてもよいのでは、と感じている。行政の側もこれから試行錯誤をしながら取り組ん

でいく。厳しい目で見えていく必要もあるが、県民の声を形にする専門家である委員の方々を県は無視できないので、ともに協力し、応援していくことも大切だと思う。県の限られた財源ですべてを賄うことは難しい。時には、民間の財団法人や国の補助金を頼りながら、県として何ができるかを考えて、試行錯誤をしながら進めていってほしい。

評価に関しては、どうしても数値が先行してしまうところがあるが、全てを数値で測れるわけではない。数値目標を達成したからよい、とするのではなく、自分たちの目標が今どの段階にいて、次はどのようなことを解決しながらやっていけばよいのか、を考えてほしい。達成していないから駄目、ということではなくて、何が障害となってできなくなっているのかを問い返しながらかやっしていけるような評価を作ることができればよいと思う。

計画をどう実施していくかは、県に預けられたわけだが、3年ではなかなか達成できないだろう。徐々にでも達成できるよう頑張ってもらいたい。

(委員)

三重県文化審議会に携わる機会がなければ、このように文化について意識しながら学校行事や学校教育を行うことはなかったように思う。

今年度、学校で体験活動を多く取り入れることで、子どもたちの年度末アンケートでは、自分たちで考えて行動することや自分たちで作りに上げていくことができるようになったという数値がとても高くなり、様々な文化に触れることや体験することは大切なことと改めて実感した。今後も、子どもたちのためになることを考えていくことが必要だと感じている。

(会長)

ボトムアップは非常に大事だが、それだけでも駄目で、県や行政と一緒にお互いにコミュニケーションをとりながら、支え合っていく必要がある。医療や健康という分野では、行政の色々な施策がある。また、病院や診療所という施設があるが、県民の皆さんの健康をもっと増進していくためには、コミュニティの力を生かすことが大事だと言われている。これはまさにボトムアップ。コミュニティも最近拡大しており、SNSでつながったコミュニティもある。そういったコミュニティの持っている潜在力を最大限生かして、行政と色々な専門機関、民間企業も含めて、互いに支え合って進めていくことが大事なことである。文化についても同様のことが言えると思う。

何らかの社会活動に参加することが、健康にとっても非常に大事だと言われている。まさに文化活動もその一つであり、そういったことが県民の皆さんの健康ある人生の幸福に結びついていると感じている。

今回の計画の策定作業は、半年という非常にタイトなスケジュールの中だったが、毎回委員の皆様から積極的なご意見をたくさんいただいた。この文化審議会での議論や委員の皆様のご協力が、三重の文化の一層の振興の大きなターニングポイントになることを期待している。